

水源の森再生プロジェクト (2021年度)

#1(06/26-27) “山の涵養力を育てる作業道のつくり方”

#2(10/09-10) “山の涵養力を育てるボサ置き・土留め・石積みの施工”

#3(12/03-05) “山の観察力を身に付ける”



◆プロジェクトの目的と概要◆

～自然と共生する昔の知恵に学び、山を育て、自分を育てる～

2021年6月から始まった本プロジェクトでは、かつての「山と向き合う土木造作」をもう一度甦らせ、針葉樹人工林を落葉広葉樹の入り混じる水源涵養力の豊かな森に戻していきます。同じ現場での活動を継続することで、その変化を体感しながら学びます。「山に向き合う姿勢・視点」を養い自然を読み解く観察力を身につけることを目標にし、日本各地で環境再生を指導できる人材を養成していきます。



◆第1回 “山の涵養力を育てる作業道のつくり方” ◆

▼水が土中に染み込むような地面に

人工林の森の中で作業するための道のつけ方ひとつで、環境を悪化もさせれば育てもします。初回は、山に水を浸透させ、豊かな森になるための歩道づくりをおこないました。急斜面の作業道も、枝そだや落ち葉でつくる苗木のマウンドも、地表を水が走らず土中に染み込むよう、水平な面ができるように段切りを行います。地形を観察し、どこに何を施すとよくなるか考えます。

作業では、単一的なスギ・ヒノキ林になった森に、広葉樹の落ち葉や枝そだを持ち込むことにより土中から多様な森を取り戻していきます。

また、皮むき間伐も行いました。今回皮むきを行った木は、来年以降立ち枯れ状態になってから間伐します。すると、パッチ状に光が林床に差す箇所が林内にでき、若い広葉樹が育つことができるようになります。広葉樹の実生が芽吹き、多くの種が入り混じる森にしていくための第一歩の作業です。

◆第2回 “山の涵養力を育てるボサ置き・土留め・石積みの施工” ◆

▼わさび田は、究極の砂防ダム

かつて小菅村内の沢のいたるところに広がっていたわさび田。沢に石垣を整備することで傾斜を調整しつつ、伏流水を保ってきました。泥詰まりを起こして伏流水の流れを止めてしまうと、わさび田として使えなくなってしまうことから、土砂の安定に常に留意して、崩壊箇所にはその都度石を積んで修復していました。その積み重ねが、治山治水の効果を発揮し、山を安定させてきました。

先人たちの知恵と技を体感しながら、石積みを実践しました。斜面には無造作に積まれた大量の石があります。石を取り除いていくと、地面にスッと空気が通る感じがします。そこに、水と空気が流れる石積みを実施していきます。すっかり荒れてしまった谷筋を石積みで安定させます。



多摩川源流のわさび田。
誰が造作したのかわからないほど昔のわさび田が今も残っています。



水を引くために昔の人が谷を掘り、石積み
築いた箇所。
谷の奥の方には当時の石積みが残っています。



今回作った石積み。
谷に築いた石積み水が引き付け、湧き出した
水はまた地表に浸透していく場所となります。



地上に無造作に積まれていた石を石積みとして
組み直しました。大地と一体になった石が土地
の涵養力を高めていきます。

◆第3回 “山の観察力を身に付ける” ◆

▼水と空気の流れを読み取る

今回の目標は、「土地を読むようになる」こと、「自然と向き合う感覚を自身の中で養う」ことです。

第1回の「道づくり」と「ボサ置き」、第2回の「石積み」を実践した作業地の、その後の様子を観察しました。作業を行ったことでうまく改善のできたところもあれば、そうでなかったところもあります。

目の前の土地の状況を読み、それぞれに必要な造作を見極める力を養うこと、それから毎回行う道づくりやボサ置きなど、水が土中に浸透していく場を作る作業の精度を上げていくことを目指しました。

山の水源涵養力を保つために不可欠な広葉樹が健康に育つ環境を整えていきます。



講師 / 『土中環境』 著者
高田 宏臣氏



源流大学HP



源流大学
メルマガ登録

◆もっと詳しく知りたい方へ◆

本講座で学ぶ技術などは、高田宏臣氏著『土中環境』や、「地球守の自然読本」にて紹介されています。

○源流大学 ☎ 0428-87-7055 ✉ info@npokosuge.jp

主催/NPO法人多摩源流こすげ・多摩川源流大学
技術協力/株式会社高田造園設計事務所・NPO法人地球守
後援/小菅村役場